

「イエス！次郎（校長室より）」（第2号） 「学校行事、大好き！」

「走るのが得意な人も、苦手な人もいるから、みんなで協力して種目を決めてくれ。」と言ったのは、教師になって3年目の私である。この言葉が効いたのか、意外とスムーズに体育祭の出場種目が決まっていた。しかし、女子100m走の選手があと一人決まらない。リーダーの女の子が提案した。「出場種目の少ない人全員でジャンケンしよう。それが平等よ。」反対意見も出ないので、ジャンケンが始まった。そして、一番走るのが苦手な女の子が負けてしまった。女の子は泣き出した。「何で泣くの？」リーダーの女の子が聞いた。女の子は答えない。ただ泣いているだけだ。たまりかねた別の女の子が、「私が代わってあげるよ。」と言ったが、「だめよ。平等にジャンケンしたんだから。ねえ。何で泣くのよ。」と、リーダーの女の子。すると、「私はきっとビリになる。そしたらみんなに文句言われる。」と小さな声で答えた。しかし、「ビリになったからって、文句言う人はこのクラスにいないわよ。」とリーダーの女の子に言われ、とうとう女の子は教室を飛び出していった。

次の日から、女の子は学校に来なくなってしまった。クラスでは緊急会議が始まった。「彼女の気持ちになって考えてみよう。」と私が言う。いろんな意見が出た。「やっぱり私が出ればよかった。学校に来てほしい。」とか、「先生は、彼女の味方ばかりしている。決め方に問題はなかったと思う。」「私だって走るの苦手だけど、我慢して走るのに。彼女は甘えすぎている。」などの厳しい意見もあった。結局、思っていることを手紙にして、女の子に渡すことになった。厳しい意見もそのまま渡すことにした。

手紙を渡してから、女の子は学校に来なかった。毎日登下校の時に、何人かの友達が家に寄ってくれたのだが、全く返事がない。とうとう一週間が経ってしまった。今日もダメだったかと思っていた放課後、リーダーの女の子から連絡が入った。急いで近くの小学校に来てほしいということだった。慌ててかけつけてみると、小学校の校庭で、スタートの練習をしている女の子と、その横で一緒になって走っているリーダーの女の子がいた。涙が止まらなかった。

体育祭本番、女子100m走。我がクラスの大声援を受けて、女の子は一生懸命走った。でもやっぱりビリだった。しかし、まるで優勝したかのような拍手が巻き起こり、少し恥ずかしそうに微笑んだ女の子を優しく包み込んだ。この子たちに出会えて、本当に良かった。

嬉しいことや楽しいことばかりではありませんが、私は学校行事が大好きです。これからも、積極的に学校行事に参加して、皆さんと一緒に素敵な思い出を作っていこうと思います。

